普及版

第９回占冠村ヒグマミーティング実施報告書

第９回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局

１．事業名称：第９回占冠村ヒグマミーティング（副題「わたしたちのヒグマを考える」）

２．事業目的

占冠村において地域に根付いたヒグマ対応力を高めるため、住民、村役場ほか関係機関等が、情報共有と意思疎通を継続的に行いながら、関連知識や対応技術の向上を図る取組みを実施したい。そこで有志による村民講座「第９回占冠村ヒグマミーティング」を企画開催した。

３．運営組織

（１）主催　第７回占冠村ヒグマミーティング実行委員会

〒079-2201 勇払郡占冠村字中央 占冠村教育委員会 社会教育担当 内

委員：門間敬行（代表）、浦田　剛（事務局）、ほか８名

（２）共催　占冠村公民館、富良野地区広域教育圏振興協議会

（３）協力　占冠村（担当部署：農林課 林業振興室 野生鳥獣専門員）

酪農学園大学 環境共生学類 野生鳥獣管理学研究室

酪農学園大学 環境共生学類 野生動物生態学研究室

帯広畜産大学 獣医学ユニット・環境生態学ユニット

（４）協賛　富良野警察署少年補導員連絡協議会占冠支部

４．日時・場所

１日目　令和８年２月１４日（土）　１１時～１９時

占冠村字中央　占冠村総合センター（村役場）２階

２日目　令和８年２月１５日（日）　１０時～１６時

占冠村字中央　占冠村総合センター（村役場）２階

５．対象者および参加者数

対象範囲を主として村民および富良野沿線住民とし、また当事業の目的に賛同して参加を希望する者とした。村内調査従事者、学識経験者を募った。

実績参加者７１名（１日目２６名、２日目５９名、重複１４名）。

ほか詳細内訳は別紙資料のとおり

６．企画概要

本事業の目的に照らし、継続的な取り組みが求められることから、前回開催日からの間隔と現場対応の閑散期であることも考慮し、冬期の開催を狙った。準備にあたり有志１０名により第９回占冠村ヒグマミーティング実行委員会を組織した。占冠村教育委員会を通じ、富良野地区広域教育圏振興協議会の共催を受けた。また占冠村（農林課林業振興室）に依頼し、資料提供と野生鳥獣専門員派遣等の協力を受けた。酪農学園大学ほか教育研究機関から出席と口頭発表を得た。また域内の青少年の安全と健全育成に寄与する取り組みとして、富良野警察署少年補導員連絡協議会占冠支部の協賛を受けた。

今回の企画検討の要件として、運営の簡素化と、分科会形式の準備プログラムの設定を目した。従来の開催形態では、数多くの大学生の卒論発表を順繰りに聞き流すだけになりがちで、村内で捕獲従事者や農業者をはじめとする関係者の身の上に起きていることや、それぞれの考え、感覚を汲み上げ、表現し、共有する働きは十分でなかった。そのため、素地として話の通じやすい立場の者ら少人数でじっくり話し合い、その結果を全体の場に届けることを主眼に、テーマを定めた分科会「小ぐま会議」を従来型の多人数参集の講演会「ひぐまセミナー」の前日に実施した。「小ぐま会議」は会場を村総合センター２階相談室とし、時間帯を分けて４個の小会議を順に催すこととした。会議テーマや会議参加者は事前に募集し、事務局案と合わせて４題、10 数名を予定した。発言者の生き死にが掛かった手の切れるような言葉を当座の全員がその身上をもって受け止める、相応の覚悟を求める重たい議論を促すため、傍聴者は交えないこととした。会議の結果の要約を２日目に口頭発表することとした。

２日目の「ひぐまセミナー」は村総合センター２階視聴覚室の奥半分の区域に約 50 席を設け、演者ひとりずつ順繰りの事例報告や研究成果発表１２題の後にパネルディスカッションを設定した。パネルディスカッションでは前日の小ぐま会議の概要報告を含め、広範に質疑を行うこととした。

展示、体験等を提供する「ひぐまひろば」は１日目、２日目ともに村総合センター２階視聴覚室の手前半分の区域に設置することとした。「ひぐまひろば」は常設の塗り絵コーナー、PC ゲームコーナー、書籍閲覧コーナー、標本展示コーナー、ひぐま作品展、しるこ会（2 日目昼のみ）を予定し、基本的に過去回に実績のある構成要素で揃えることとした。また記念品の製作頒布を省くなど、過去回よりもやや簡素化を図った。過去の開催において、「ひろば」と講演会場をどのように組み合わせるかは全体計画上の懸案のひとつであり、同じ部屋にすると手狭であったり相互にノ

イズとなって利用の便の妨げになったりすることが懸念された。また部屋を別にすると、「ひろば」に拘束される者（年少者の保護者やスタッフなど）が講演を聴講できない弊害があった。前々回（第７回）においては別部屋にしつつ、ビデオカメラと大型モニターを用い、公演の模様を「ひろば」会場で同時視聴を可能とする措置を取ったが、準備の手間や音質、音量の確保に課題を残した。前回（第８回）は日も場所も分ける形となったが、来場の顔ぶれも分かれた上、「ひろば」の来場者がごく少なくなった。今回は第６回と同じく「ひろば」を講演会場と同じ部屋にまとめ、各コーナーの配置を工夫して、世話する大人が講演を聴講しやすく、遊ぶ子供が講演会場側の視線から距離を取りやすくした。

８．実施の概況

（１）設営作業

初日は８時半から９時にかけて順次スタッフが参集し、会場の設営（机と椅子、展示物の配置）、案内看板の設置を行った。初日にスタッフ扱いとしたのは実行委員８（村民６、職員２）、農林課長、酪農大６名の計１５名であった。このとき２日目の「ひぐまセミナー」の会場設営も概ね済ませた。今回は国道沿いの大看板を省略した。

（２）１日目「小ぐま会議」実施状況

村総合センター２階相談室にて予定通り 13 時より開始した。テーマの異なる４つの会議をそれぞれ概ね１時間強かけて順繰りに実施した。出席者は各テーマ 13～15 名で、全体を通じた重複を除く人数は 16 名であった。テーマごとの内容は別紙資料「小ぐま会議結果要旨」にまとめた。

過去のヒグマミーティングでは参加の少なかった捕獲従事者を集めることに努力し、担当職員を含め８名の出席を得た。また、星野リゾート・トマムのヒグマ対応体制構築で中心的役割を担うスタッフが出席して事例紹介を行い、今後の挙村連携構築に向け、内実のあるやりとりができた。また酪農大の担当教員を囲み、日頃鬱積のあれこれも胸襟を開いて話し合えた。そのほかのテーマでも出席者らの、村民としても特異的な立場や専門的な視点に根差した濃い話し合いができた。これまで言葉になっていなかったことを言葉にするためには何らかの濃縮が必要で、傍聴や録画を排した当企画の狙いがある程度は当たったものと評価できた。

無論、その結果として議論は必ずしも収束を見ず、記録に残しづらい話、残せない話も多く、翌日のパネルディスカッションではこの実施状況を効果的には共有できなかった。掘り起こした情報や意見を全体の成果として活かす道筋にはなお困難が多いと言える。それでも、集約され漂白された認識だけで社会が流れていくのではなく、対象動物との生のつながりや、当事者ひとりひとりの思いを大切にしていくため

には、野生と社会、個人と集団との途方もない乖離を少しでも埋め、橋渡しする取り組みがこれからも求められる。これまでのヒグマミーティングの至らぬところを認識し、これからも現場感覚に肉薄するアプローチを試みていく。

（３）２日目「ひぐまセミナー」実施状況

総合センター２階視聴覚室に設けた講演会場で、予定通り１１時より開始した。午前１時間と午後１時間、演者ひとりずつ順繰りに事例報告や研究成果発表１２題を行った。その後、休憩を挟んで１時間半程度、パネルディスカッションを実施した。聴講者席は 40～45 人分で概ね８割程度が埋まったほか、隣接の「ひぐまひろば」から聴講していた参加者もいた。以下事務局のメモに基づく各発表の要約を記す。

（３―１）占冠村ヒグマ動向年次報告　（小田中温／占冠村）

当年度に村内で確認されたヒグマの動きについて、情報数による概況、秋のミズナラ豊凶、被害防止の観点による特記事案１件、農作物利用と季節別痕跡記録、普及活動に分けて解説した。（別紙資料参照）

（３―２）野生鳥獣管理学研究室 2025 年度活動報告（伊藤哲治／酪農学園大学）

野生鳥獣管理学研究室（伊藤ゼミ）の村内調査活動の概況と研究室での活動について説明した。カメラ・トラップやヘア・トラップ調査で集められたデータ、サンプルからどのような解析を行い、結果が得られるか語られた。

（３－３）占冠村におけるヒグマの集中・非集中行動域の比較（高橋響／酪農学園大学）

過去の GPS 標識個体の追跡データから、集中行動域と非集中行動域に分け、現地調査を行い、各行動域の環境調査の結果報告。季節により集中行動域は変化しており、採食目的での滞在であることが示唆され、調査で判明した環境中の餌資源について示された。また非集中行動域では林道や作業道の利用が確認された。さらに現地調査に併せ GPS 測位データを解析することによって時空間的な行動解析が可能になるなど展望が語られた。（卒業研究）

（３－４）占冠村におけるヒグマの遺伝的情報を用いた生息状況（松本佳穂里／酪農学園大学）

村内に設置したヒグマのヘア・トラップから採取された体毛サンプルを用いて、遺伝子情報から個体識別を行い、明らかとなったヒグマの生息状況についての結果報告。村内に分布する推定ヒグマ個体数が示され、現在推定されている日高・夕張個体群の推定個体数から大きく外れたものではないことが明らかとなった。今後さらなる解析に期待される。（卒業研究）

（３－５）長野県・愛知県・岐阜県におけるニホンカモシカ個体群の遺伝的構造解析（田代麻衣／酪農学園大学）
　長野県、愛知県、岐阜県に分布するニホンカモシカの DNA 情報から、３県の地域個体群の遺伝的空間構造を解析した。遺伝情報から、元々は共通の祖先集団であった地域が地理的障壁の影響によって、現在は移動が制限されている可能性を示した。今後のさらなる遺伝的流動解析によるカモシカの動態把握が期待される。（卒業研究）

（３－６）圃場を利用するヒグマの個体間関係（本田実紀／酪農学園大学）
　村内のデントコーン圃場に設置したヘア・トラップおよび防鹿柵から採取された体毛サンプルを用いて、圃場を利用しているヒグマ個体を特定し、個体間関係や駆除率を解析した結果報告。特定の個体が繰り返し圃場を利用しているほか、デントコーン収穫後も圃場利用が確認された。収穫後も電気柵を設置するなど、定着的な利用個体への対策の必要性が提起された。（卒業研究）

（３－７）酪農学園大学構内の圃場に出没するエゾシカの防除方法の評価（高見澤奈々／酪農学園大学）
　酪農学園大学構内の圃場に出没するエゾシカに対して電気柵および嫌音波装置の有効性について評価を試みたもの。電気柵設置期間は柵内での目撃頭数が減少しているものの、嫌音波装置は有効範囲が狭く、シカが利用している通路幅によって左右されるなど、運用方法や改善点について指摘がなされた。（卒業研究）

（３－８）野幌森林公園周辺および占冠村におけるアライグマの胃・大腸内容物の比較 （畠快斗／酪農学園大学）
　アライグマは雑食性であり、生息環境によって食性に傾向がみられることから、地域間での食性の違いを調べ、被害対策につなげようとするもの。野幌森林公園と占冠村のアライグマでは食性に違いがみられ、占冠村ではゴミへの依存が高いことが示された。今回特定できなかった内容物を含め、新たな解析を加えることによって、さらに詳細な食性情報が得られると、今後の展望が語られた。（卒業研究）

（３－９）野生鳥獣管理学研究室３年生自己紹介・来年度の抱負
　来年度から卒業論文作成に取り組む野生鳥獣管理学研究室３年生５名から、それぞれ自己紹介と調査研究に対する抱負についての発表があった。新たな調査を計画している学生や研究を引き継ぎ、さらなる調査を予定している学生など各々が研究計画を語った。（卒業研究）

（３－10）シカなどの大型哺乳類における匂いコミュニケーションと臭腺研究（冨安洵平／帯広畜産大学）
　シカの匂いによる個体間のコミュニケーションとその匂いを発する臭腺の構造についての研究発表。世界のシカで確認されている臭腺の説明から、エゾシカでの臭腺の発達状況、生理学的な発達の仕組み、特異的な行動との関連、生態学的な役割まで、多角的にその研究課題の奥行きを示した。ひぐまセミナー当日は発表者が参加できなかったため、事務局が代理で発表をおこなった。（学術研究）

（３―11）ヒグマ捕獲個体に寄生するマダニに係る研究計画(仮)（長沼知子／帯広畜産大学）

帯広畜産大学では、来年度からヒグマに付着したマダニの研究、体毛サンプルを用いた研究の２つを予定しており、研究の背景や目的について説明した。マダニの研究では、寄生マダニの種構成や発育ステージ、季節変化について調べることを目的としおり、マダニの分布状況の把握が期待される。一方、体毛を用いた研究では、体毛から食性を調べ、農作物への依存度やその季節性を調べることを目的としており、捕獲個体がどのような餌資源を食べていたか解明が期待される。（研究計画）

（３－12）ドローン撮影画像を用いたヒグマによるデントコーン食害面積の簡易推定（菊池アヤ／酪農学園大学）

ドローンの空撮画像を用いて、ヒグマによる食害面積を簡易的に割り出すことを目的とし、調査を実施した２地域の結果が報告された。被害が発生した圃場の多くが森林や河川に近接する傾向があったほか、簡易推定手法により被害状況を客観的かつ定量的に評価できるなど、今後の農業被害対策に資する基礎情報として活用されることを期待するとまとめた。（卒業研究）

（３－13）パネルディスカッション

「わたしたちのヒグマを考える」～占冠村のヒグマ諸課題と私たちの現在地～

酪農大の伊藤講師、村の浦田専門員、小田中調査員の３名が会場前方で参加者らと向き合って着席し、質疑応答を行った。参加者からの質問や意見に演壇の３名が回答するのみならず、会場の専門家、あるいは当事者に回答、意見を求めるなどし、実質的にパネラーが随所に所在する形で進めた。冒頭に「小ぐま会議」の状況報告を行い、あとはセミナーの内容を含め、自由な内容で発言があった。

扱われた内容について要点のみ以下に示す。

- 上トマムでヒグマの活動のある村道上でサイクリングや散歩をする人への対応。
- 村のヒグマ情報の早期の告知。
- 箱わなの運用の技術的課題について。
- 問題個体ではないヒグマの捕殺の是非について
- エゾシカ侵入防止実験の使用音波の周波数帯について
- ヒグマの餌資源調査について。環境収容力の検討はできるか。
- 餌資源調査、豊凶調査のメニューの検討、個体数推定の解釈について。

（４）「ひぐまひろば」実施状況

両日に渡って設置、提供した。会場は視聴覚室の入り口側半分を使い、施設備品の長机、パイプ椅子を配置し、物品を配置した。構成要素ごとの実施状況を以下に示す。

（４－１）

受付台ひとつを入り口に向け配置し、来場者記入用紙を置いた。担当者席からひぐまセミナーの演壇が見えるようにした。１日目は有光委員、２日目は下川委員を中心とし、酪農学園大学学生ボランティアが補佐した。

（４－２）塗り絵コーナー

長机２基を合わせて椅子で囲み、色鉛筆や色ペン、クレヨン、紙などの画材を用意した。今回特製の塗り絵の図案が浦田香純委員により用意され、印刷して供用した。

（４－３）書籍、文献閲覧コーナー

浦田専門員が収集収蔵するヒグマや野生鳥獣関係の書籍のほか、酪農大等から進呈を受けた論文の写しを持ち込み、長机に並べた。幼児向けの絵本はヒグマ関係に限らず織り交ぜた。多くの来場者に利用された。

（４－４）標本展示コーナー

長机を並べ、浦田専門員が収集収蔵する骨格や毛皮、糞等の実物標本を陳列した。解説員の配置はなく、必要に応じ、近くのスタッフが対応した。

（４－５）ヒグマゲームコーナー

会場の一角にテレビモニターとノートパソコン、コントローラーの 3 点セットを３組用意した。ゲームプログラムはヒグマミーティングオリジナルのものを使用し、新作３種を含む６種を提供した。オペレーターのスタッフが常駐した。

子供だけでなく、大人にも利用された。

（４－６）茶菓コーナー

会場の一隅に電気ポットひとつと紙コップ、インスタントコーヒーの粉や日本茶、紅茶のティーバッグ、飴玉を置いた。

（４－７）しるこ会

２日目の昼休みの時間帯に、参加者持ち寄りで汁粉を食した。小豆は１キロを前日に委員の自宅２軒で分担して煮たものを鍋のまま持ち込み、会場で温めなおした。餅はパック切り餅を電気トースターで焼いたものと、チューブケーシング入り白玉団子を切って水戻ししたものを併用した。会場では下川委員、荒映子委員、振興局職員が担当した。多くの参加があった。

（４－８）その他の事項

使用する部屋は集中暖房区画のため、当日は村総務課に依頼しボイラーを運転してもらった。会場建物玄関、廊下、階段等各所に会場やトイレへの経路を表示する掲示を行った。過去年に設置実績があった「作品展」は応募がなく設置しなかった。また授乳室は失念して設置しなかったが、乳児の来場はなかった模様であった。

両日に渡り HBC の取材を受けた。現下、素材を放送に使用する具体的な予定はなく、予備的な取材である。２日目には北海道新聞富良野支局の取材があった。事前に申し入れはなかったが、毎日新聞旭川支局も取材した。

９．成果と課題

（１）ヒグマミーティングの基本構想について

科学的知見の普及、学習を対策の基盤に据えること、地域のさまざまな関係者が集まって情報共有と相互交流を持つことなどのヒグマミーティングの基本的な理念は評価を得ており、この先も継続して活動していくに値するものと考えられる。ただ過去回の経緯や今回の検討過程のなかでは、通り一遍の講演会では地域課題の深層への突っ込みが足りず、深層を抱える人たち（農業者や捕獲従事者など）へのアプローチにも不足が感じられており、今回は「小ぐま会議」を試みるに至った。そもそもヒグマミーティング構想はヒグマを巡る地域の集会として万能たりえず、生来の「ヒグマ知の共有」に徹して、課題解決は別儀とすることも理である。それでもなお、私たちのヒグマミーティングが実情から浮遊していかないよう、なんらかの取り組みが求められている。

催事の形態としては、第６回から今次第９回までの４回で、日数と部屋配置の組み合わせがすべて異なるパタンを試したことになった。今後の検討に資すると考えられる。

（２）今次ヒグマミーティングの実施結果について

当事業においては事故、怪我、係争等を生ぜず、また多くの参加者を得て、予定の内容を実施できた。企画上の要件とした運営の簡素化により、スタッフの負担軽減を図ることができた。また分科会形式の「小ぐま会議」を試行できた。「ひぐまセミナー」では多くの参加を得たなかで予定の演題をこなすことができた。「ヒグマひろば」は簡素化のなかでも新たなコンテンツを投入できた。よって当事業は一定の成功を見たものと考えられる。

（３）次期ヒグマミーティングの企画に向けて

過去回までの積み残し課題のなかで、今回も改善を見なかったこと、新たに浮上した課題も多くあった。今後、同様の催事を企画するに向けて、備忘として確認事項を以下に列記する。

- 実施形態の検討要件・・・出来るだけ多くの参加希望者が無理なく参加でき、できるだけ豊富な情報を十分な時間をかけて提供でき、年少者や高齢者にも体力的な負担が少なく、できるだけ楽しく快適な催事とすること。
- 運営組織・・・実行委員会形式（住民グループ）で妥当か。
- 共催、協力先・・・教委との協議を早めに。告知時期をもっと早くすること。登壇者との関係性、費用負担等も早めの確認を。

・ヒグマに関するコアな関係者の関与の充実を。参加しやすさの工夫。分科会形式も依然として有力案。広報の段取り上の工夫も。
・記念品、製作品は？・・・あれば楽しい。経費、作業負担は。
・日数、時間帯、開催地域はどうか。一部屋か二部屋か。実況システム、オンライン利用はどうするか。授乳室、控室。

11．謝辞

今回の開催にあたり以下の方々、関係機関のご協力をいただいた。実行委員一同より心から謝意を表します。（順不同）

占冠村（農林課林業振興室、企画商工課、総務課ほか）、占冠村教育委員会、富良野地区広域教育圏振興協議会、北海道猟友会富良野支部占冠部会、酪農学園大学野生動物生態学研究室、酪農学園大学野生鳥獣管理学研究室、帯広畜産大学獣医学ユニット解剖学研究室、帯広畜産大学環境生態学ユニット、富良野警察署占冠駐在所、ほかご来場の皆様

12．別紙資料

・別紙資料１＊　参加者名簿・集計表
・別紙資料２　第９回占冠村ヒグマミーティング開催要領（会場配布資料）
・別紙資料３　会場配置図等
・別紙資料４　実施状況写真等
・別紙資料５　小ぐま会議結果要旨
・別紙資料６　占冠村発表「令和７年期の村のヒグマ情勢」スライド抜粋
・別紙資料７　ひぐまひろば供用 PC ゲーム一覧
・別紙資料８＊＊　第９回占冠村ヒグマミーティング実施計画
・別紙資料９＊＊　第９回占冠村ヒグマミーティング収支決算報告
・別紙資料１０＊＊　第９回占冠村ヒグマミーティング実行委員会設置要綱

資料の構成について

＊ ･･･部内向け報告書に付す名簿は参加者氏名を記載し、部外秘扱いとした。普及用報告書に付すものは参加者氏名を伏せ、人数集計表のみとした。

＊＊･･･部内向け報告書にのみ収録した。

部内向け報告書の配布先 ～ 実行委員、講師、占冠村、占冠村教育委員会

以上

別紙資料１
（普及用）

第９回占冠村ヒグマミーティング　参加者数集計表

1日目(2/14)	村内	村外富良野圏	ほか村外	小計
実行委員	8	0	0	8
大学関係	0	0	6	6
ほか一般	9	0	3	12
合計	17	0	9	26

2日目(2/15)	村内	村外富良野圏	ほか村外	小計
実行委員	6	0	0	6
大学関係	0	0	23	23
ほか一般	15	3	12	30
合計	21	3	35	59

両 日 総 計	村内	村外富良野圏	ほか村外	小計
実行委員	9	0	0	9
大学関係	0	0	26	26
ほか一般	21	3	12	36
合計	**30**	**3**	**38**	**71**

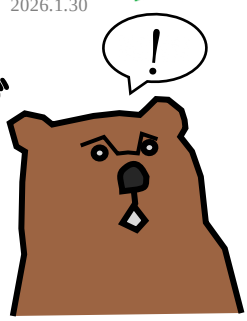
両日とも参加	村内	村外富良野圏	ほか村外	小計
実行委員	5	0	0	5
大学関係	0	0	3	3
ほか一般	3	0	3	6
合計	8	0	6	14

2026.1.30

第二報

富良野地区広域教育圏振興協議会共催事業

第９回 占冠村ヒグマミーティング
「わたしたちのヒグマを考える」



ご あ ん な い

占冠村ヒグマミーティングは、ヒグマに強い地域づくりを目指す村と村民有志、専門家による学習会です。日本全国がクマ騒動の中、わたしたちが浮足立つことなく、油断するでもなく、納得のいくヒグマ対応を自らで考え、自らで実施していくためには、ヒグマを知り、自らを省みる取り組みは欠かせません。９回目となる今回は、日頃の懸案を本気で話し合って相互理解や活動方針を導く新企画「小ぐま会議」を創設。恒例の調査研究報告「ひぐまセミナー」や体験閲覧コーナー「ひぐまひろば」もいっそうの充実を目指します。

ヒグマでお悩みの方、ヒグマが好きな方、その両方の方、どちらでもない方も、ぜひご参加ください。

◆主催：第９回占冠村ヒグマミーティング実行委員会
◆共催：富良野地区広域教育圏振興協議会　◆協力：酪農学園大学／占冠村

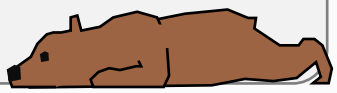
令和８年　２月１４日（土曜日）

「小ぐま会議」13時～18時

占冠村総合センター（村役場）２階相談室

予め設定したテーマに沿って、少人数で話し合いを行い、その結果を翌日の「ひぐま会議」に持ち込みます。
※自由参加枠はありません。

詳細は裏面をご覧ください。



「ひぐまひろば」

2/14　11時～19時
2/15　10時～15時
村役場２階視聴覚室

開催中は常設です。
お好きなときにご利用ください。

- ●書籍、文献閲覧コーナー
- ●標本、模型展示コーナー
- ●ヒグマゲームコーナー
- ●塗り絵・工作コーナー
- ●しるこ会　ほか

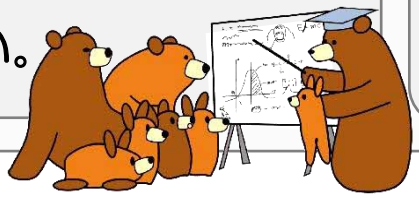
令和８年　２月１５日（日曜日）

「ひぐまセミナー」11時～15時

占冠村総合センター（村役場）２階視聴覚室

大学など研究機関の発表と、占冠村によるヒグマ年次報告「小ぐま会議」を受けたパネルディスカッション。観覧自由

詳細は裏面をご覧ください。



お問い合わせ、連絡先：第９回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局
電話　090－8966－3000（野生鳥獣専門員　浦田）

新企画

「小ぐま会議」開催情報　（2月 14 日・役場二階相談室）

・設定したテーマに沿って話し合います。会議参加者について、一般からの自推募集は締め切りました。開催日までに事務局からの依頼を含めて選定します。
・会議は非公開ですが、総括した結果や出席者氏名を翌日の「ひぐまセミナー」で報告します。また、村ホームページ等に掲載する全体報告の中にも収録します。
・テーマと進行次第は下表のとおりです。それぞれで趣旨説明、討論、総括と進めます。出席予定者には別途、詳細を事務局からご案内します。

小会議テーマ	実施時刻(目安)
① 村のヒグマ対応従事者のあり方と育成、緊急時対応を考える	13:00～13:50
② 村の次年度ヒグマ対応体制(ゾーニング管理案)を考える	14:00～14:50
③ 観光地のヒグマ対策の現在地と努力の方向を考える	16:00～16:50
④ 学術捕獲と GPS テレメトリ調査、ヘアトラップ調査のいまと明日を考える	17:10～18:00

「ひぐまセミナー」開催案内　（2月 15日・役場二階視聴覚室）

・聴講は事前の申し込み不要です。途中入退場は自由です。お気軽にお越しください。
・予定の演題と進行次第は下表のとおりです。当日の変更は会場でお知らせいたします。

演 題		時刻(目安)
挨拶、趣旨説明	事 務 局	11:00～11:10
占冠村ヒグマ動向年次報告	占 冠 村	11:10～11:20
酪農大野生鳥獣管理学研究室 2025 年度活動報告	酪農学園大学	11:20～11:30
占冠村におけるヒグマの集中・非集中行動域の比較	酪農学園大学	11:30～11:40
占冠村におけるヒグマの遺伝的情報を用いた生息状況	酪農学園大学	11:40～11:50
長野県・愛知県・岐阜県におけるニホンカモシカ個体群の遺伝的構造解析	酪農学園大学	11:50～12:00
圃場を利用するヒグマの個体間関係	酪農学園大学	12:00～12:10
休		
酪農学園大学構内の圃場に出没するエゾシカの防除方法の評価	酪農学園大学	13:00～13:10
野幌森林公園周辺および占冠村におけるアライグマの胃・大腸内容物の比較	酪農学園大学	13:10～13:20
次年度研究計画(8 名程度)	酪農学園大学	13:20～13:40
ヒグマやシカなどの大型哺乳類における匂いコミュニケーションと臭腺研究	帯広畜産大学	13:40～13:50
ヒグマ捕獲個体に寄生するマダニに係る研究計画(仮)	帯広畜産大学	14:50～14:00
休		
パネルディスカッション「わたしたちのヒグマを考える」 ～占冠村のヒグマ諸課題と私たちの現在地～	事務局ほか	14:10～15:00

▲講演の録音録画、映写資料の撮影は原則お断りいたします。また発表内容、配布物等の無断転載はおやめください。そのほかは事務局にお問い合わせください。
▲会場で村の広報や報道機関の取材が想定されます。特に撮影や取材を避けたい方は会場担当までお申し出ください。

ヒグマ作品展

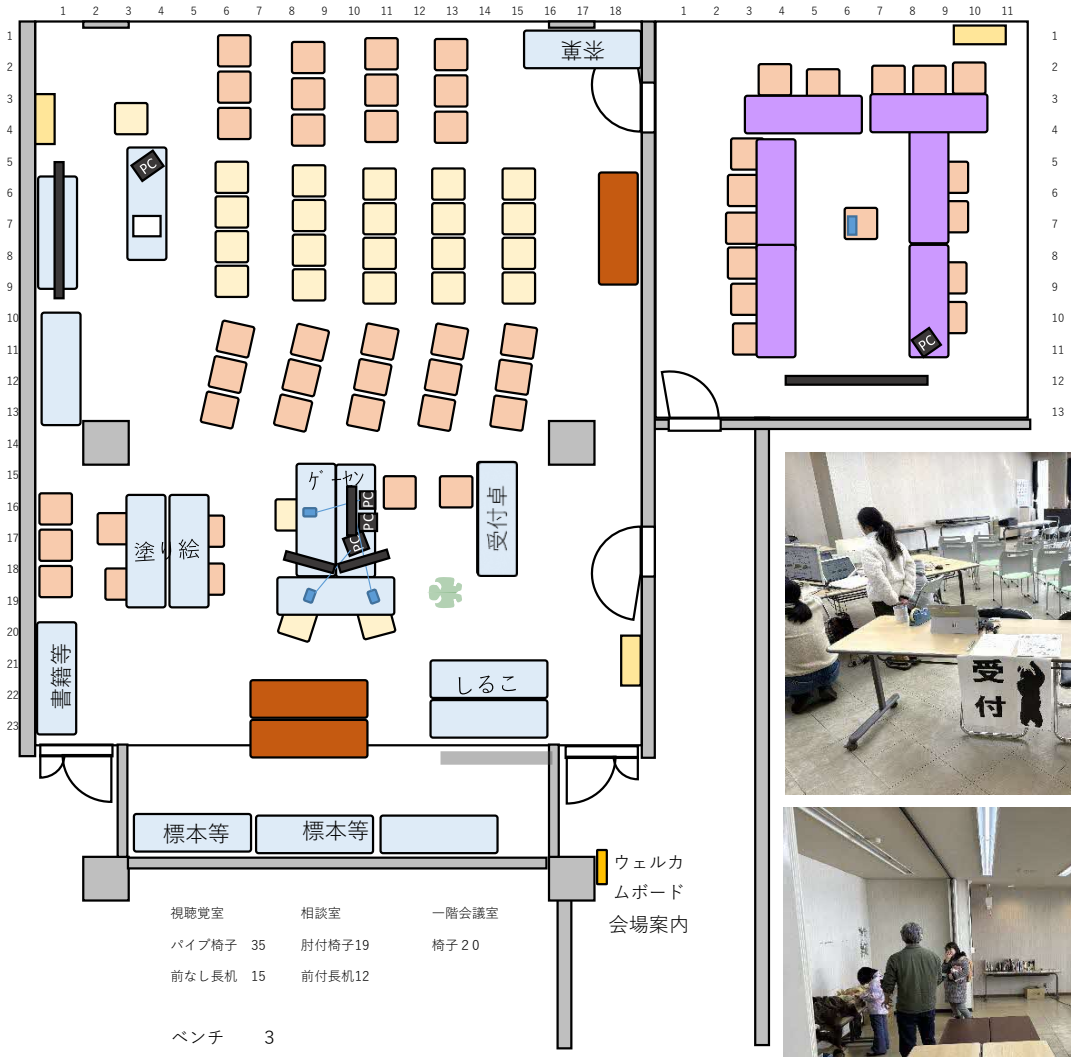
絵画、書画、折紙、彫刻、塑像、手芸等々お寄せください。出品ご希望の方は前日までのご一報を。

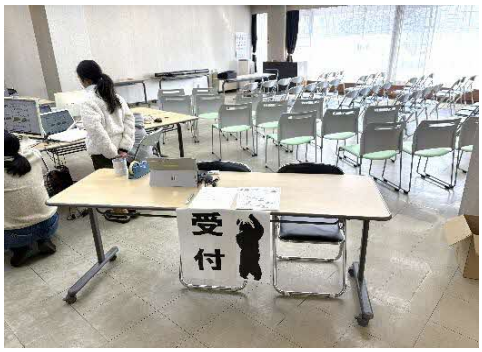
しるこ会

十五日のお昼にしるこの無料配布を予定。おわん、お箸ご持参推奨いたします。品切れ御免！

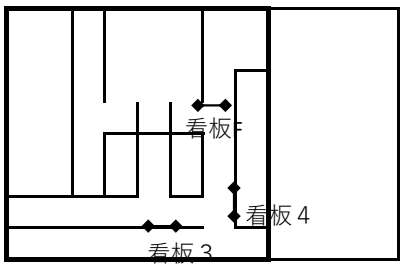
お問い合わせ、お申込み連絡先：第８回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局
電話 090－8966－3000（野生鳥獣専門員 浦田）

第9回占冠村ヒグマミーテイング　会場設営配置（実績）





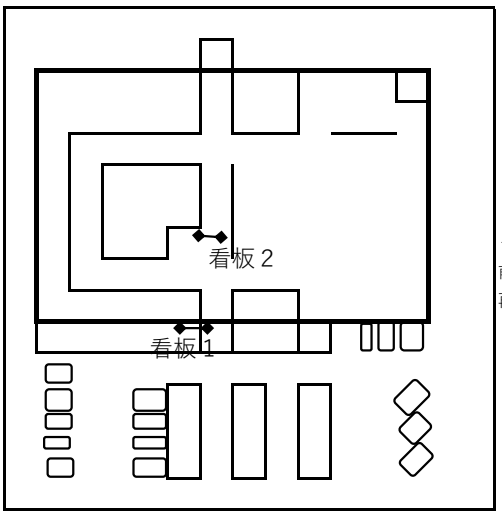
看板４



看板F
ウェルカムボード
受付・ひろば・会議

A3プリント
「ヒグマミーティング」
「通路奥」　＆矢印

看板３　A3プリント
「ヒグマミーティング」印刷
「このさきひだり」　印刷
＆矢印　印刷



看板２
「ヒグマミーティング会場この先」

看板１

「ヒグマミーティング会場入口」
前回のそのまま
再制作

大看板

取りやめ
要補修

第９回占冠村ヒグマミーティング　実施状況写真

１．小ぐま会議

２．ひぐまセミナー

会場全景

村発表

酪農大発表（伊藤講師）

酪農大発表（学生）

パネルディスカッション

伊藤講師　　小田中　　浦田

佐藤教授　　鈴木農林課長

３．ひぐまひろば

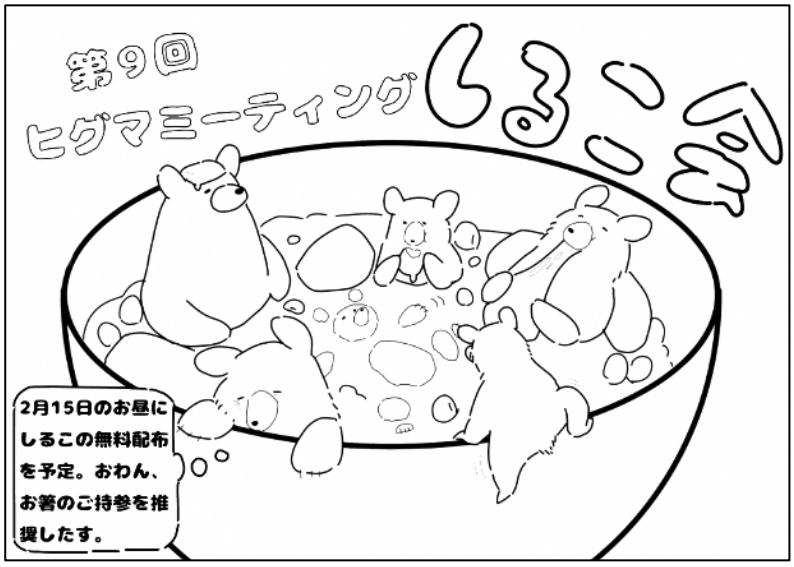
ＰＣゲームコーナー

標本展示コーナー

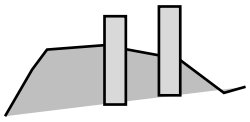
塗り絵コーナー

しるこ会

会場風景



特製塗り絵図案

①	**観光地のヒグマ対策の現在地と努力の方向を考える**	13:00～14:20
出席者	黒井宏諭、有光良次、荒哲平、荒映子、小尾雅彦、橋本陽、後木氏、住田所長、伊藤講師、成瀬学生、髙木学生、髙見澤学生、浦田専門員、小田中調査員、鈴木課長	
趣旨説明 資料提示	・トマムのリゾートエリアにおける近年事情（村） ・トマムのリゾートエリアにおける事業者の取り組み（後木氏） ・その他来村者、森林河川レジャーにおける被害防止について 	
討論 論旨	・リゾートエリアは直近2年は静かだが、過去にはエリア全体でヒグマの活動あり、捕殺もあり。人身事故はまだない。 ・観光業での事故は企業のダメージも大きい。 ・星野リゾート　トマムは社内でのルール作りを進めた。 ・予め攻撃的になっているのではないクマ（通常のクマ）への対応方針を整理。ゲストに許す領域の明確化（紙地図、看板）。危険個所の環境改善（草刈り、照明）、閉鎖の基準づくり、社の対応毎のゾーニング、情報ヒアリングシート、クマスプレー訓練。 ・社の対応エリア外も含め、村への情報共有は堅持。危険な性状のクマへの対処は、早急に村につなぐこと。 ・外国からの人も多い。感覚の異なる点も。ルーズさを感じることもあり。山林だけでなく、ホテル周辺でのゴミ捨てなども見受けられる。完全には見回りきれない。 ・ゴミの管理徹底は事業のも含めて重点。職場と居住域の双方で意識と方法の普及を ・シカの増加はどう作用するだろうか？表面化していないが。交通事故や今後の捕獲での死骸管理を徹底。 ・社員による取り組みは進んでいるが、非専門的人材にて過負担な面も。→巡視等の段階でも定期的に村と合同の実施を。 ・クラブメッドさんは？いまは事業者同士で結合した対応体制はなく、それぞれが村とリンクしている。粘り強くツナギを深めながら、より良い体制を常に狙っていく。 ・リゾート以外にも、釣りやクライミング、ラフティングも。釣りのマナーは不安視。全国的なクマ事故ニュースによる風評的影響も。 ・不安への問い合わせに対しては、実態と対策について隠さず丁寧な説明が良。説明できる実態があることが重要。 ・事故防止に係る社会的責任の所在は？クマは完全防止の方法論がない中での責任に。 ・普及に当たり、映像などを効果的に用いたコンテンツが有効では。 ・ほか	
まとめ	・村内居住者以上に村外からの来訪者対応について様々な心配や困難があることを共有した。 ・星野リゾート　トマムさんが村の先を行く取り組みを進めていること。またその妥当性を確認した。 ・村は星野リゾート　トマムさんの巡視に同行するなど更に連携を進めることで合意。 ・酪農大は村と事業者の協力を得てリゾートエリアでのヘアトラップカメラトラップの調査努力を投下し、成果を共有する。 ・来年度ヒグマフォーラムに絡めた取り組みの推進について希望を共有した。 ・一般フィールドでの事故防止について目覚ましい方針は無いが、地道に取り組みを続けて安全文化を普及していくこと。風評も逆手に、関心層へ有用な普及を行うこと。	

②	**村のヒグマ対応従事者のあり方と育成、緊急時対応を考える**	14:30～15:35
出席者	黒井宏諭、有光良次、荒哲平、荒映子、小尾雅彦、後木氏、住田所長、伊藤講師、 黒田氏、成瀬学生、髙木学生、髙見澤学生、浦田専門員、小田中調査員、鈴木課長	
趣旨説明 資料提示	・誰が、どんな立場で、どんな役割を担うあり方が望ましく、当事者の納得に至るのか。 ・対応体制を維持するために、求められる方策は？ 村のヒグマ対応体制フロー、各銃種弾頭エネルギー曲線、年度出役実績 過去の実対応、訓練等の取り組み事例	
討論 論旨	・これまで、かなり放漫にお願いしてきた経緯あり。無理なことも、とりあえずお願いはしておくことが、狩猟者の立場を立てることにもなっていた。 ・公の捕獲だから公務員が当たるべきとの側面と、住民が当事者であるからこそ公の捕獲であり、住民主体、一住民として当たるべきとの考えの両面がある。自身がどのように考えたいかを考えたい。安易にガバメントハンタームーブに乗せられたくない。 ・このさき、各々が納得できない形で活動を強いられることが無いようにしたい。 ・体制に実効性も必要。銃さえあれば一律にクマに向かわせるわけにもいかない。 ・前月の帯広の研修でも、経験や機材や技量による差を深刻に感じさせられた。 ・10年のうちは、シカを捕りながら経験を積んでいくのが良いのでは。⇔いまの村内のシカの取り方だけでは、クマ対応の経験は積めないのでは。 ・出没対応や護衛などのクマ対応のための技量を身につける取り組みの不足、不安あり。 ・育成目的の捕獲機会の拡充が必要。⇔そのための捕獲があって良いのか？クマのことを思うと。それぞれにとってヒグマがどんな存在なのかが根底にある。 ・個々人に技量を付するための捕獲はスジとして狩猟たるべきだが。 ・クマを捕りたい、という願望が全体として減退している状況があるような。 ・これまで、どんな時にクマを捕るかは基準もあったがその中で迷いもあった。いまは外的制約に頼らなくても逸脱はないだろう。我々が本当に素でどうしたいのかを語るべき ・素で考えたとき、（住民狩猟者として）使命感というのはある。農家さんや住民に対して。 ・ほか	
まとめ	・技量向上に向けた具体的な取り組みは引き続き実施していく。 実猟、射場、その他実技、座学。村が中心になって。種目の拡充を約束。 ・技量や機材、その人の考えを考慮した配置、活用をしていく。 ・個人の立場とは別に、公の要求もあり得ることを理解。動機の所在を認識していくことが大事。 ・考え方や立場の説明についてはファジーなところ、幅があることを互いに理解した上で、より納得のいく形になるよう関係者間のコミュニケーションを図っていく。「いま、我々の立場、責務、それらの説明はあいまいだよ」「でもその中で、ひとつひとつの事案、対象（個体）について、よく考え、スジを通し、納得に近い対応を講じていくよ」と。	

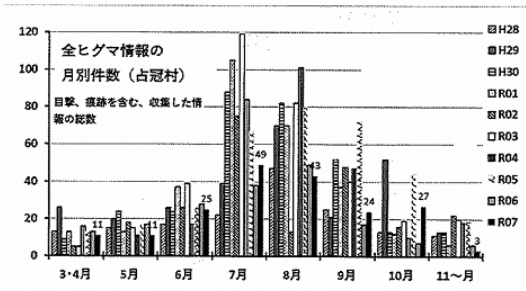
③	**村の次年度ヒグマ対応体制（ゾーニング管理案）を考える**	16:15～17:25
出席者	黒井宏諭、有光良次、荒哲平、荒映子、小尾雅彦、黒田氏、伊藤講師、 成瀬学生、髙木学生、髙見澤学生、浦田専門員、小田中調査員、鈴木課長	
趣旨説明 資料提示	ヒグマ捕獲の従来の枠組み。道の新方針。ゾーニングや春期管理捕獲の考え方 ・人里から遠ざけるため、あるいは個体数（増加）を抑制するための捕獲を私たちはどれほど望んでいるのだろうか。・・・ホントにその気になれるのか？ ・道の管理計画改定のポイント	
討論 論旨	・道として、問題個体対応を非としているわけではない。むしろその重要性は高まっている。 ・排除区域、防除区域を設定したとして、そこでの対応方針は基本的にこれまで通り。問題の核心は緩衝地帯での取り組みをどう考えるかということ。 ・捕獲経験の機会としての価値⇔その目的で捕りたいのかの疑問。 ・私たちの対応の自由度を高める方策としてゾーニング管理を捉え得るかも（とりあえず設定だけしておけば、あとでどうにでもできる）。 ⇔　理念をきちんと表現せず、方便として制度を運用することになれば問題。 ・ゾーニング管理での他市町村での成功事例はあるか？⇒聞いたことない。⇒都市と森林の広がり方、接し方によって意義や効果の違いがあるだろう。札幌などは模式図の図式とも近しくイメージしやすいが。 ・ヒグマによる被害があるけれども、なるべくなら殺したくない気持ちがある。その個体がいることで、他の個体を遠ざけていることもあるかもしれないし。 ・法的制約の枠内で、わたしたち側にまだだいぶ裁量の幅がある。現行の方式の中で捕獲側に振っていくこともできる。いま捕り控えている形になっている部分（捕りしろ）をさらに捕ることを考えたとき、必ずしも緩衝地帯設定でなくても実施可能。 ・ほか	
まとめ	・手続きとしてゾーニング設定するかは、一旦、村担当に預けてもらう。 ・今の問題個別の対応を突き進めていくことには合意 ・捕獲機会獲得のための事業は猟区の研修事業として狩猟の枠組みも活用していく。 ・夏期の山中に箱わなを多数設置する事業モデルは当面、採らないでいたい。 ・ヒグマと直に向き合うわたしたちが、本当にやりたいアクションを選んでいきたい。	

④	**学術捕獲と GPS テレメトリ調査、ヘアトラップ調査のいまと明日を考える**	17:10～18:00
出席者	黒井宏諭、有光良次、荒哲平、荒映子、小尾雅彦、黒田氏、伊藤講師、住田所長 成瀬学生、髙木学生、髙見澤学生、浦田専門員、小田中調査員、鈴木課長	
趣旨説明 資料提示	酪農大占冠調査開始以来の生態捕獲、GPS、HT、CT 調査の実施実績（伊藤） 村内の不安と今後の取り組み方針について課題提起。	
討論 論旨	・村民としては最大限協力していきたいが、何をどうやっているのかわからないことも多い。 ・スジとしては、WIN―WIN ではなく共通の利益を持つべき。成果を重視したい。 ・トラブルが起きる原因として、打合せ不足は見えてきている。改善しましょう。 ・情報は実はもうある。受け取れる準備として、報告だけでなく事前の打合せ、決起の機会を設けたい ・アクシデント事例の再確認 ・対象個体が受ける不利益をどう考える？もっと大事にしてほしい。 ・大学とは別の、道総研の HT の話、大丈夫なのか。やるとなったらやるが、納得できる計画なのか？	
まとめ	・中継ぎをしている村も、もっと円滑に連携できるよう努力。 ・地域側は、研究に邁進没入する立場もある程度理解すべき。 ・生体捕獲の事故防止、もっと引いた監視ライン、余裕ある作業日程、十分な打合せ。 ・我々の研究へ向き合う立ち位置は一概ではない。それぞれでどうなのか、認識し、表現していくことも重要。 ・シーズン前、シーズン入りの打合せ、発表会、決起集会はぜひやりましょう。	

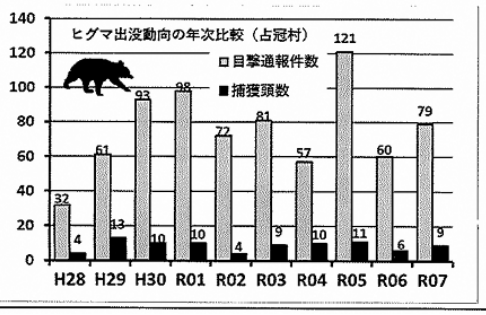
令和７年の占冠村ヒグマ情勢

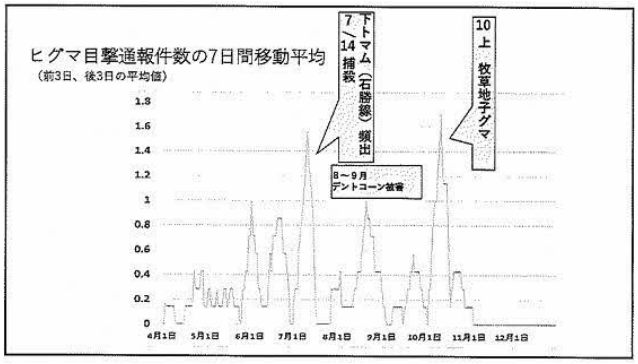
占冠村　農林課　林業振興室
野生鳥獣調査員　小田中　温

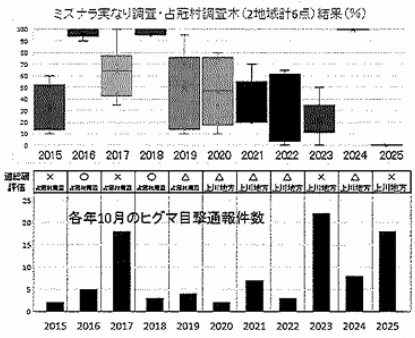
今年までの概況

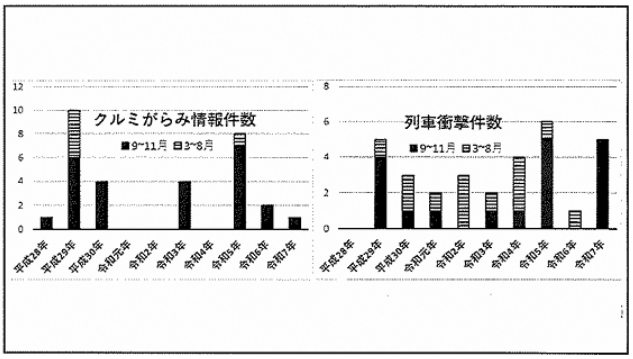


今年までの概況









下トマム(石勝線沿い）頻出個体対応

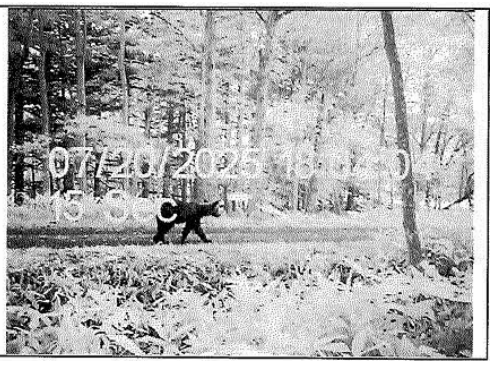
●											目撃	7月9日	2:20	平成以降 [illegible] 場所 [illegible]kp
●											目撃	7月11日	22:07	下トマム [illegible] 場所 92.0kp
●											目撃	7月11日	8:28	下トマム [illegible] 場所 92.8kp
●											目撃	7月11日	9:07	下トマム [illegible] 場所 92.8kp
●											目撃	7月11日	9:42	下トマム [illegible] 場所 92.8kp
●											目撃	7月11日	9:29	下トマム [illegible] 場所 92.8kp
●											目撃	7月11日	18:55	下トマム シーサイドパーム～[illegible] [illegible]
●	●		●		●				●		目撃 シカ死体[illegible] [illegible] 足跡	7月14日	14:50	下トマム 石勝線[illegible]kp上[illegible]

食痕(草本)

6月29日撮影

上トマム 自動撮影

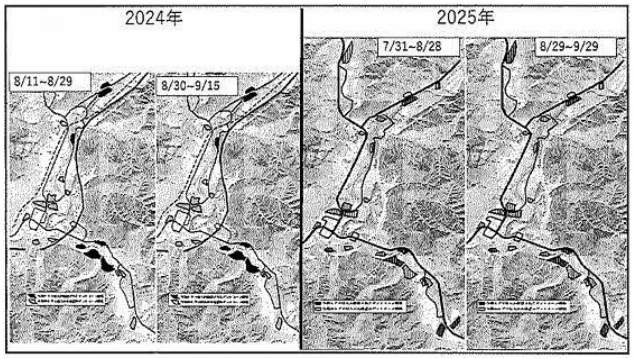
日付	時刻
7月5日	18:54
7月8日	4:41
7月8日	21:50
7月10日	4:49
7月16日	0:30
7月17日	21:34
7月20日	18:04
7月24日	21:46
7月26日	18:15
7月31日	17:57
8月3日	18:59
8月5日	5:22
9月28日	5:17



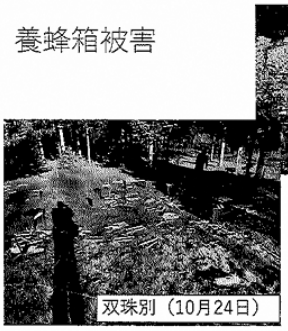
上トマム
自動撮影

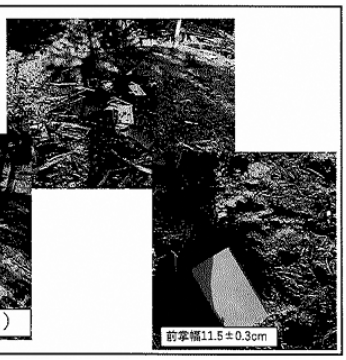
日付	時刻
7月5日	18:54
7月6日	4:41
7月8日	21:50
7月10日	4:49
7月16日	0:30
7月17日	21:34
7月20日	18:04
7月24日	21:46
7月26日	18:15
7月31日	17:57
8月3日	18:59
8月5日	5:22
9月28日	5:17

デントコーン被害

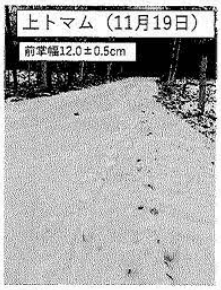


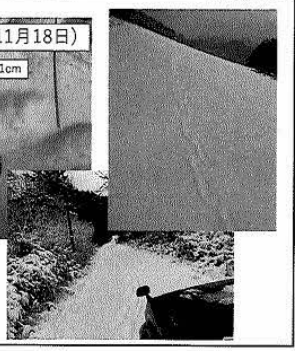
養蜂箱被害





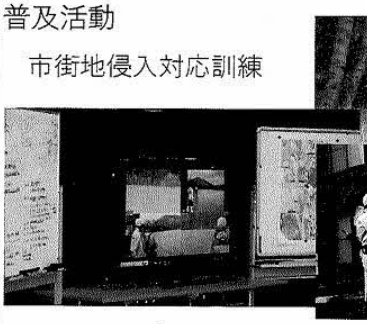
冬(足跡)

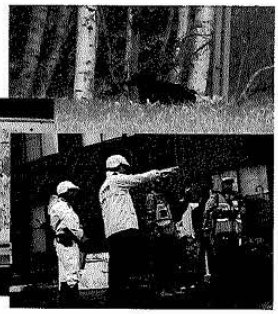


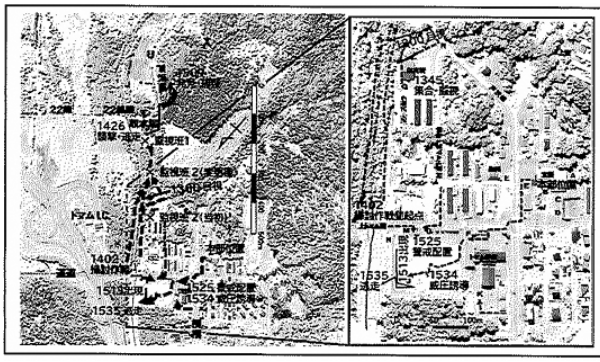


普及活動

市街地侵入対応訓練







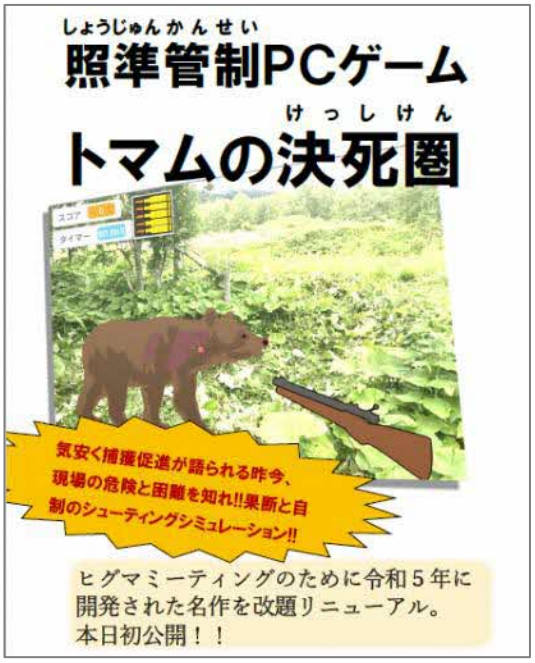
クマスプレー発射訓練

PC版ヒグマクイズ
ひぐま百般三択版
Ver.1
問題 2
ヒグマはどれでしょうか？
ヒグマのあれこれを
クイズでたのしくま
なぼう!!
つぎはみんなであ
たらしいクイズをか
んがえよう!!
ヒグマミーティング
向けに令和５年開発のベ
ストセラー！！

PC版ヒグマクイズ
ひぐま百般三択版
Ver.2
問題 2　ヒグマのあかちゃん
うまれるときのおもさは？
40
400
4000
ヒグマのあれこれを
クイズでたのしくま
なぼう!!
つぎはみんなであ
たらしいクイズをか
んがえよう!!
令和５年開発のベテラン
ゲームに待望の続編！！
本日初公開！！

山中模索PCゲーム
ミズバショウを貪れ!!
Ver.1
春の山中、5株のミズバショウを
素早く探り出せ！緊迫のタイム
アタック
令和５年開発のベストセラー

山中模索PCゲーム第2弾
樹上の適期!!
Ver.1
ミヤママタタビ
コクワ
コクワ
ヤマブドウ
ヤマブドウ
1 ～ 5 の順序で素早く木の上のごちそうを見つけ出せ！！
天高くクマ肥ゆる秋、ツル性浸果
を探り当てて大木を駆け登れ！
緊迫のタイムアタック再来
第９回ヒグマミーティングに
合わせて開発された新製品！
本日初公開！！


照準管制PCゲーム
トマムの決死圏
気安く捕獲促進が語られる昨今、
現場の危険と困難を知れ!!果断と自
制のシューティングシミュレーション!!
ヒグマミーティングのために令和５年に
開発された名作を改題リニューアル。
本日初公開！！

これは踊りか背擦りか？
せこすり Dancing
Ver.1
踊れ！擦れ！
精魂尽き果て
るまで！
第９回ヒグマミーティングに
合わせて開発された新製品！
本日初公開！！